



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	有島武郎文学の研究 : 女性を書くこと [全文の要約]
Author(s)	張, 輝
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13694号
Issue Date	2019-06-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75104
Type	doctoral thesis
File Information	Hui_Zhang_summary.pdf



学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：張 輝

学位論文題目

有島武郎文学の研究 ——女性を書くこと——

本論文は、有島武郎文学における女性表象を考察するもので、序論、本論（三部・十章）、結論から構成されている。序論では、女性を書くことについての有島の評論を援用し、先行研究の問題点と本研究の課題を検討した。本論では、有島が女性表象の限界をいかに超えたかを明らかにした。具体的に、第一部で少女を物語る小説群に着目し、「お末の死」（一九一四）「クララの出家」（一九一七）『宣言』（一九一五）の作品を取り上げ、有島の女性憧憬の諸相を検討した。第二部においては、『石にひしがれた雑草』（一九一八）と『或る女』（一九一一～一九一九）を取り上げ、有島の中期作品における、男性を翻弄する女性の登場と男性登場人物のセクシュアリティの変容の関係を明確化した。『或る女』から『星座』まで、有島が創出する女性像の変化は、西洋に対する態度と直接に関わると思われるため、第三部では、有島の思想転換を示した『迷路』（一九一六～一九一八）と『星座』（一九二一）を取り上げ、有島作品における新しい女性の誕生の経緯を明らかにした。以下、章ごとに論点をまとめる。

第一章「お末の死」論——戦う少女の世界

「お末の死」において、お末の家族の中の男性たちが相次いで他界したことにより、女性たちの葛藤が、お末を死に追い込む直接の原因となる。このような女性人物関係は、特に注目に値する。前期の短編小説であるためか、見落とされがちな作品であり、フェミニズム批評による解説もほとんど見られない。第一章では、自由を求めて、あえて女性共同体との関係を断絶するお末の造形を解明しつつ、有島の少女憧憬を検討した。

第二章「クララの出家」論——少女共同体とエロス

「クララの出家」は、聖女クララの過剰な性欲の描写がその特徴であり、聖と性という相反するような要素が共存しているため、先行研究の争点となってきた。だが、聖の世界とは何であろうか。家を飛び出し、修道生活に入ったクララが、フランスの創立した兄弟団に入らず、「貧しき貴婦人たち」という女子修道会を創立したのである。第二章では、男性や大人女性を排除し、少女の美のみを楽しむことは、

聖の世界の本質にほかならないことを明らかにした。さらに、「クララの出家」は「お末の死」と同様、有島の少女憧憬が反映された小説として捉え直した。

第三章『宣言』論——女性の独立とは何か

第三章では、これまで検討された男性恋愛物語の挫折と女性の変貌に焦点を当て、Y子の独立は男性の啓蒙によるものであることを指摘した。さらに、女性の啓蒙に対する有島の批判意識を読み取った。『或る女』や『星座』に認められた、女性への啓蒙を懐疑的に見る姿勢はすでに『宣言』から窺える。一方では、『宣言』は「少女憧憬」から「脱少女憧憬」に向けたテキストと位置付けた。

第四章『石にひしがれた雑草』論——権力・主体・視線

見るM子と見られる加藤、能動的なM子と受動的なA、『石にひしがれた雑草』には、明確なジェンダー配置の反転が起こる。しかしながら、男権的なイデオロギーの下で、このような関係の矯正は、登場人物の「運命」というべく必然的なことである。それは、この作品が語る近代的な恋愛の本質である。第四章では、このような男女の権力関係の反転と再反転、およびそれを表現するための小説技法を考察した。

第五章『或る女』論 その一——ジェンダー配置の逆転

『或る女』では、強くて主動的な女性、弱くて受動的な男性という一般的な図式を逆転させた権力関係を呈示しているが、それはあくまでも男性セクシュアリティが変容した結果にすぎないことを指摘した。

第六章『或る女』論 その二——西洋を補助線に

男性の楽しむ対象としての「女」と西洋の強い文化を象徴する「王」の要素が彼女の身に集約し、葉子の運命を決めることを読み取った。第五章で検討した、葉子と男性たちの関係には、男性が下、女性が上という権力関係の逆転が起こる一方、葉子が従属的な地位にいるという逆説的構図は、根本的にそれに由来すると読んだ。近代女性の西洋的な教養や西洋の美に過度に耽溺する日本の空虚性を批判する小説として、『或る女』を評価した。

第七章『或る女』論 その三——否定の力

第七章では、『或る女』の女性たちの間に反復される闘争が、不確定・不安定さによって示されていることを明らかにした。女性が自らで女性を語ろうとする様相の表現が試みられている。有島の女性の啓蒙を相対化しようとする思想が、すでに『或る女』に反映されている。このように、ジェンダー配置の逆転によって女性の受動性を露呈させる点において、『或る女』は、『石にひしがれた雑草』と共通している

が同時に、近代日本における女性の可能性をとらえようとするものになっている。

第八章 『迷路』論——混血児の行方

先行研究の多くは主人公の差別体験に注目し、『迷路』を、ある日本人の恋愛の挫折の物語とされてきたが、Aとアメリカ人の関係には、排除や差別が端的に表現されながらも、作品には異国の恋愛体験の日常化、異なる階級や国の導入など、無視できない要素が存在する。これらの要素により「劣等」的な位置ではなく、アメリカ人と交流ができる主人公像が構築されうる。このような語り方は、先行研究とは異なった、日本人像を示すものであることを検討した。それによって、東西文明の混合や西洋文明の同化に対し、態度を保留する有島の姿勢が確認できる。『或る女』で露呈する西洋崇拜への否定は、『迷路』に至ってさらに進化することが明らかになっている。

第九章 『星座』論 その一——日本回帰と女性啓蒙の否定

『星座』は、男性が女性に英語を教える、そして恋愛関係に至るという当時の文壇に流行していたパターンを採用しているが、啓蒙者の星野の病気や、啓蒙に抵抗する園とおぬいの結びつきは、当時の風潮を相対化しようとする作品の趣旨を示していることを検討した。さらに、この作品は女性啓蒙を男性によるものでなければならないという事実を忠実に反映しつつ、一方では女性教育の従属性に対する批判意識を有する作品と評価した。

第一〇章 『星座』論 その二——差異と交流

この章では、『星座』における有島の相互扶助の思想とおぬいの造形を中心に考察した。おぬいは、富裕から貧乏へと転落しており、財産放棄の意を決めた有島の状況と重なり、生来の階級を乗り越えようとする有島の念願を寄託される人物であることを指摘した。また、他人を無条件に信頼する性格や、人間の同質性を認める気質から、おぬいを相互扶助思想の中心人物として捉え直した。女性啓蒙を相対化し、有島が構想する相互扶助の世界で重要な役割を果たす女性・おぬいの誕生を、『星座』に認める。

結論では、自己の男性としての限界を意識し、絶えずそれを相対化しつつ女性を書くことを、有島の創作活動最大の特徴として捉えた。